

第2回 双葉町復興まちづくり委員会 議事概要

■日時：平成24年8月28日（火） 午後2時30分～午後4時45分

■場所：双葉町役場埼玉支所 3階LL教室

■出席者：別紙座席表のとおり

■議事概要

1. 開会

2. 議事

(1) 会議の公開等について

今後の会議の公開等について、以下のとおり決定した。

- 会議は公開とする。
- 会議資料は原則として公開とする。
- 会議終了後に事務局において意見の概要を整理した議事概要を作成し、ホームページに掲載する。
- 議事録は、発言者に確認の上、発言者も含めてホームページに掲載する。

(2) 「7000人の復興会議」福島市会議の結果について

資料3に基づき、みんなでまちづくりサポート本部事務局より説明。

(3) 今後の検討の進め方について

資料4, 5に基づき、事務局より説明。

委員の主な意見は以下のとおり。

- 避難している方が一堂に会して話し合いの機会として「7000人の復興会議（以下、「復興会議」という。）」はよいことだと思う。しかし、会議に参加してみると、参加者が何について話し合ったらよいか戸惑っているように見えた。復興に対する町の基本的な理念の下で、短期的、中期的、長期的にどういうことが課題なのか整理して議論を進めるべきではないか。復興会議だけでは、どのくらいの町民の意見集約ができるのか疑問。
- より多くの町民の意見を集めるために、世代別にアンケートを行い、その結果を踏まえて、この委員会で短期的、中期的、長期的なビジョンを検討するべきではないか。
- 復興会議に出られないお年寄りもいるので簡単で誰にも分かりやすいアンケートを行ってはどうか。
- 帰る時期や帰る場所が決まらない中で復興まちづくりの議論はできないのではないか。
- 時間とともに町民の考え方も変わるので、今の町民の状況を探るためには、

いろいろな方法を組み合わせる必要がある。アンケート調査を組み合わせるなど工夫も必要である。

- 復興会議を否定するものではないが、期間を区切って意見を聞かないと前に進まないのではないかと。
- 時期や条件によって意見は変わるものなので、いつでも意見が出せることが必要である。
- 復興会議の進め方や問題設定が、平時のまちづくり計画の手法に見える。元の町に戻る、戻らないという前提が見えない中では、参加者がリアリティを持った意見が出しにくいのではないかと。ワークショップという手法はよいが、避難から1年半を経た状態では、問題設定を明確にすることや、選択肢を示すなどをしないと、参加者のいらだちが募るのではないかと懸念される。
- 復興会議では、大変な思いで避難生活を続けている町民の意見を率直に聞く場を設け、現実には皆さんが抱えている不安を受け止めるということが一つの柱になるのではないかと。
- 実際に復興会議福島市会議に参加して、お互いに顔を見ながら意見を出し合い、議論をまとめていくことは大変有意義に感じた。アンケートも必要だろうが、いろいろな方法を総合的に組み合わせる結論を出すべきだ。
- 7月に委員長あてに意見を文書で送っているが、各委員から提出された意見をどのように分析されているか。提出された意見が会議に反映されていないのではないかと。
- 復興会議で出た意見について、特に課題の部分を整理した上、今後の方針を詰めていけばよいのではないかと。
- 町民の気持ちは時間を経るうちに変わっていくが、ある時点で集約をしなければ先に進めない。時間が経てば経つだけ町民の心は離れていく。町民の心が離れないうちに集中して審議していくことがこの会議を成功させることになる。
- 町に戻る話をするのか、「仮の町」の話をするのか、話し合いのテーマを決めないと、話し合いの目的が違うところに行ってみても話が進まない。
- 余裕がない状況だからこそ、まずはみんなが双葉町の良いところを再確認し、その後で、帰る、帰れないといった共通する問題に考えていくというやり方は良い。
- 町民の意見は様々なので、一度の復興会議で話をまとめることはせず、数回の復興会議を経て中間的なまとめを行い、部会につなげていきたい。
- 悠長なことは言ってもらえない。待ってもらえない人たちも相当数いる。

- 部会の設定にあたっては、教育や福祉といったテーマではなく、「仮の町」の設計といった具体的なテーマで、部会での検討材料も町民からすくい上げていく方針で進めるべきだ。
- もうはっきりしてほしいというのが町民の意見。双葉町の復興まちづくりとは、元の双葉町に行って復興するのか、あるいはどこかで復興させるのか。復興まちづくりをどのようにしていくのか、委員長が案を示してはどうか。
- 町民の考えは、もししばらく戻れないとなれば、どうやってその時間をつないでいくかということになる。仮設住宅で長い間住み続けるわけにはいかないので、災害公営住宅などで、避難中の生活の質をより高めていくことも考えることが必要である。
- 選択肢が一つでは合意形成できないので、町民一人一人が自分にあったものを選ぶよう、これらの選択肢を戦略的に考えていく時期である。廃炉の問題、工程の問題、除染の問題、補償の問題などの様々な情報を町民の皆さんと共有しながら議論しないといけない。
- 最終的にはふるさとに戻るということを前提で、復興計画はつukらないといけないのではないか。
- ここ2～3年の生活支援といった短期的なもの、「仮の町」のあり方など中期的なもの、線量や除染の問題など長期的なもの、それぞれの視野に立って計画をつくっていくべきではないか。
- 短期の段階では「ふるさとの復興」はできない。今、避難している人たち一人一人の生活再建を支援することが計画の中心となるのではないか。
- 町長に対して「とりあえず今はまだ帰れない」ということを町民に対して十分説明してもらいたいという声が出ている。この委員会は、帰れることを前提としてやっているものなのか、仮の町をつくってとりあえずはそこに行って帰られる日が来たら帰るという段階を踏んで考えているのか、前提が見えない。
- この委員会において、町内の蓄積放射線量マップの情報を共有し、科学的根拠に基づいて住民一人一人の決意を促していくということも必要である。
- これまで人が住んできた環境があるのに、人が住めないという方針を出すのはどうか。100年かかってでも双葉町を必ず元に戻して、次の世代に渡すという決意は必要である。
- 時間が経てば経つほど子どもたちはばらばらになってしまう。早く学校を再開したい。
- 住民の多くは、避難生活上の問題に追われている。困っている問題が山積し

ている中で前に進んで行かなければならないのに、この場では議論が遠回りしていると感じる。

- できるだけ早く皆さんが納得できる方向に行くようなテーマを設定した方がいい。
- 双葉町ではこの委員会がようやく始まったばかりであり、これまでの遅れがみんなの焦りになっているので、今はきちんと交通整理して進める段階である。
- 復興会議は、なぜもっと早くできなかったのか。みんなの意見を吸い上げて、心から意見をぶつけ合った話し合いが必要である。
- 意見を吸い上げてもらいたいというよりも、先に決めてもらいたいという気持ちもある。
- 町民に情報が届いていない中でアンケートをとってもよい結果は出てこない。
- 「仮の町」は一つの選択肢ではあるが、それだけでは済まされない。自力建設の場合の補償問題など、制度的な枠組みの問題点を明らかにしながら、具体的な戦略について考えていかないといけない。
- 今回の災害は、放射能の問題をまず考える必要がある点に特殊性がある。前提となる放射能についてクリアにし、町民に理解してもらうのが先である。
- 復興会議の進め方については、テーマを絞って意見を集めるべきではないか。その意見に基づき部会で議論しこの委員会でビジョンを決めていく進め方かどうか。
- 双葉町というものをなくしたくないという思いがある。放射能の問題はあるが、将来の孫たちに双葉町を残したいと思う。高齢者は双葉町の自宅に戻りたいと思っているが、戻っても何もできないというのも現実である。
- 非常に線量が高いところもあるが、沿岸部は放射線が低い。そうした地区をどうするのか。
- 復興まちづくり委員会は、100年後の復興に向けた議論をするのか、10年、20年先の議論をするのか、はっきりさせることが必要である。
- 将来、子どもたちが双葉町とつながることができる仕組みを考えておくことが必要である。
- 避難生活の中でも双葉町のアイデンティティを残し、ばらばらになっても町民が繋がり続けるためには、双葉町の絆を確保するためのコミュニティ論と、新しいところでのコミュニティ論の2つの戦略を作らなければならない、どちらかを選択するというものではない。
- 避難生活の苦しさを理解して、議論を進めていくことが必要である。